



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士 (医学)
報告番号	甲第1515号
学位記番号	第1086号
氏名	白石 直
授与年月日	平成 28年 3月 25日
学位論文の題名	<p>Brief Psychoeducation for Schizophrenia Primarily Intended to Change the Cognition of Auditory Hallucinations: An Exploratory Study</p> <p>(幻聴への認知の変化を主目的とした統合失調症に対する短期心理教育：予備的研究)</p> <p>The Journal of Nervous and Mental Disease. Vol. 202 : P.35-39, 2014</p>
論文審査担当者	<p>主査： 早野 順一郎</p> <p>副査： 松川 則之, 明智 龍男</p>

論文内容の要旨

【背景】

幻聴と妄想は統合失調症の中核を成す症状である。両者は相互に影響を及ぼしながら精神病症状を形成しており、幻聴の原因あるいは発信源を他者に帰属させる認知バイアスの存在が、幻聴による二次妄想を発展させる可能性が指摘されている。本研究は、幻聴への認知の変化を介した統合失調症に対する短期心理教育が、妄想を軽減させる効果の検証を目的とする。

【方法】

幻聴症状を有する 18 歳から 64 歳までの統合失調症患者に対し、毎週 60 分・全 5 セッションの構造化されたグループ心理教育の単群介入試験を行った。ベースラインと介入終了時（4 週間後）の 2 時点を評価時期とし、主要評価項目として妄想を 21-Item Peters et al. Delusions Inventory (21-Item PDI) で評価した。21-Item PDI は、被害・関係念慮や誇大性、猜疑心など 11 項目の下位尺度から構成される。また、副次評価項目として幻聴に対する認知（悪意、善意、影響力、抵抗、関与）を Beliefs About Voices Questionnaire-Revised (BAVQ-R)、抑うつ重症度を Beck Depression Inventory-II (BDI-II) で評価した。本研究は、八事病院 倫理審査委員会の承認の上、対象者から書面による同意を得て行われた。

【結果】

2009 年 3 月から 2011 年 7 月の間で計 22 人が参加し、全対象者が介入と評価を完遂した。男女比は、1:1 で、年齢・罹病期間・入院回数の中央値は、それぞれ 32 歳 (18-60)・57.5 カ月 (4-336)・1 回 (0-8) であった。結果として、21-Item PDI の得点は、平均で 3.3 点改善した (95%CI: 1.4-5.1, $P < 0.01$)。また、幻聴に対する認知のうち、関与の変化量と 21-Item PDI の妄想得点の変化量との関連 ($F(1,20) = 5.679, P < 0.05$) を認め、21-Item PDI の下位尺度の各項目のうち、関係念慮 (65%) や被害念慮 (63%) の減少率が高かった。さらに、BDI-II は、平均で 4.6 点の改善を認めた (95%CI: 0.4-8.9, $P < 0.05$)。

【結論】

本研究は、幻聴への認知の変化を主目的とした心理教育的介入が、統合失調症の妄想を軽減させる可能性を示唆した初めての研究である。介入が、幻聴に対する関与の低下を介して妄想を軽減させる可能性に加え、被害・関係念慮のような幻聴の影響を受けやすい二次妄想に対して、より効果的である可能性が示された。統合失調症に対する心理教育は、抑うつ状態を悪化させる危険性が知られているが、本研究では、抑うつ重症度の有意な改善を認め、抑うつ状態に対する副次的な有用性を併せもつ可能性が示された。

論文審査の結果の要旨

【目的】 幻聴・妄想は、統合失調症の主症状である。これら二つの陽性症状は、互いに影響を与えあっており、認知バイアスとして、幻聴の原因または発信源の帰属が他者に存在すると、幻聴から二次妄想が発生しうることが知られている。本研究は、幻聴への認知の変化を主目的とした統合失調症に対する心理教育が、妄想軽減への効果を有するか否かを検証することを目的とする。

【対象および方法】 18歳以上64歳以下の幻聴症状を有する統合失調症患者に対し、毎週60分・全5回の構造化された集団心理教育の単群の介入試験を施行した。ベースラインと介入終了時（4週間後）を評価時点とし、主要評価項目として妄想を21-Item Peters et al. Delusions Inventory (21-Item PDI)で評価した。21-Item PDIは、11項目の下位尺度（被害・関係念慮や誇大性、猜疑心など）から構成される。また、二次評価項目として幻聴に対する信念（悪意、善意、影響力、抵抗、関与）をBeliefs About Voices Questionnaire-Revised (BAVQ-R)で、抑うつ重症度をBeck Depression Inventory-II (BDI-II)で評価した。本研究は、八事病院の倫理審査委員会の承認を得た上で、対象者から書面による同意を得て実施した。

【結果】 2009年3月から2011年7月の期間で、全対象者22人が介入と評価を完遂した。男女比は1：1で、年齢/罹病期間/入院回数の中央値は、それぞれ32歳（18-60）/57.5か月（4-336）/1回（0-8）であった。結果として、21-Item PDI得点は、平均3.3点の改善を認めた（95%CI: 1.4-5.1, $P < 0.01$ ）。さらに、幻聴に対する認知に関し、関与の変化量と21-Item PDI得点の変化量との有意な関連（ $F(1, 20) = 5.679$, $P < 0.05$ ）を認め、21-Item PDIの下位尺度の各項目では、関係念慮（65%）や被害念慮（63%）が高い減少率を示した。また、BDI-IIは、平均4.6点の改善を認めた（95%CI: 0.4-8.9, $P < 0.05$ ）。

【結論】 本研究は、幻聴への認知の変化を介する短期の心理教育的介入が、統合失調症の妄想を軽減させる可能性を示唆した初の研究である。介入が、幻聴に対する関与の低下を介して妄想を軽減させる可能性に加え、被害・関係念慮などの幻聴が影響を及ぼしやすい妄想に対し、より効果的である可能性が示された。また、統合失調症に対する心理教育は、抑うつ状態を悪化させるリスクがあるが、本研究では、抑うつ重症度の有意な改善を認め、抑うつに対する副次的な有用性を併せもつ可能性が示された。

【審査の内容】 約25分間のプレゼンテーションの後に、主査の早野からは、今回採用した評価尺度BAVQ-Rは認知バイアスを評価しているのか、幻聴に対する認知バイアスが二次的な妄想を起こすという仮説の妥当性を支持する知見は何か、今回の介入は幻聴そのものの重症度に影響を与えていないのかなど、主として研究の方法論および結果の解釈などに関する7項目の質問を行った。また第一副査の松川教授からは、統合失調症の客観的な診断方法や幻聴の責任病巣および生物学的メカニズムなど今回研究対象とした疾患の生物学的な病態に加え、修正した介入法の具体的な内容、今回の研究デザインでプラセボ効果の可能性を否定できるのか、研究結果の今後の発展性など疾患の病態の理解、研究の方法論やデザイン、今後の展開を中心とした8項目の質問がなされた。第二副査の明智教授からは、専門領域に関連して、双極性障害に対する薬物療法、治療抵抗性うつ病に対する治療戦略、不眠症の疾患概念の変化など、3つの質問がなされた。いずれに対しても満足のいく回答が得られ、学位論文の主旨を十分理解していると判断した。本研究は、統合失調症患者への心理教育的介入が妄想症状を軽減させ得ることを示唆したはじめての研究であり、意義の高い研究である。以上をもって本論文の著者には、博士（医学）の称号を与えるに相応しいと判断した。

論文審査担当者 主査 早野 順一郎

副査 松川 則之、明智 龍男